

●リウマチ治療の最前線

グローバルスタンダードの治療で 関節リウマチ患者さんを苦しみから救っていききたい

大阪府・牛尾整形外科

初診の場合は、特に時間をかけてじっくり診断

牛尾整形外科は、大阪市東淀川区に2005年に開業、リウマチ科・整形外科・リハビリテーション科の3科を標榜している。開業後3年を経て1日に約120名、1ヵ月では延べ2,500名の患者さんが来院するまでになり、地域の信頼を集めて順調な発展を続けている。まずは牛尾一康院長に運営理念から伺った。「すべての患者さんに、世界標準レベルの治療を提供していきたくて考えています。関節リウマチ(RA)は『治らない病気』と思っ込んでいらっしゃる方が少なくありませんが、今では画期的な治療薬の登場により『治る病気』になっ



牛尾一康院長

ています。患者さんの思われる『治る』というのは、あちこちの関節が腫れて痛いのがなくなり、今まで通りの生活・仕事を、今まで通り続けられる、ということだと思います。その意味で、『コントロールできる』といった方がより合っているかもしれません。他の多くの病気、たとえば高血圧症や糖尿病も、医師が行っているのは、原因遺伝子の修復をしているわけではなく、その症状、つまり血圧・血糖値を正常域にコントロールすることで、生命予後に直結する心臓・血管系の障害を起こさないようにしようとしているわけです。RAの治療も全く同じで、RAの炎症を早期からしっかりコントロールすることで、関節の腫れや痛みがなくなり、さらに関節はもちろん、肺や心臓・血管系などの全身の障害を起こさないようにしようとしているのです。従来はできなかったレベルにまで、RAのコン



牛尾整形外科

トロールがしっかりできるようになってきたということです。そのようなことをしっかり伝えながら、グローバルスタンダードの治療を行っていきたくて考えています」。

同院に通うRA患者は約170名。診断・治療では、特に初診の患者さんに対し、じっくり時間をかけているのが特徴だ。

「症状はいつ頃から、どのような感じで現れているのか、症状の強弱の変化はどうか、今の生活では何が一番困っているのか、治療においてどのような対応を望むのか、などを詳しく聞きます。そして丁寧に触診を行い、レントゲン撮影や血液検査などを経て、総合的に診断しています」。

同院ではRAと診断がついたら、メトトレキサート(MTX)の内服から始めるのを基本としている。従来はブシラミンなどから使い始め、効果がない場合にMTXに切り替えるという手法もあったが、現在ではその効果が広く認められているため、早くからMTXを使用しているのだ。

寛解を乗り越えて治癒に近い状態の患者さんも

さらに、MTXを投与しても効果が上がらない患者

さんに対しては、インフリキシマブ(レミケード®)などの生物学的製剤を使用している。

「特に、比較的早期で活動性が高く、合併症もなく、副作用の危険性が低い方に、生物学的製剤をすすめています。整形外科医としての経験から、多発性に強い腫れや痛みが大関節に出ている場合などは、患者さんの予後を考えて早めの使用を検討するようにしています。現在、42名の患者さんに生物学的製剤を導入しており、うちレミケード®は27名に使用しています。レミケード®は2ヵ月に1回の点滴でよいので、仕事を持つ方や忙しい方におすすめしやすいですね。また当院には吹田、守口や堺、神戸など、やや遠方から来られる患者さんもいらっしゃいますが、そういう方にもレミケード®は喜ばれますね」。

レミケード®を多く使う理由はそれだけではない。レミケード®は、ほぼ100%の症例に効果があり、寛解に近い患者さんも相当数いるということだ。

中には、寛解を乗り越えて治癒に近い段階に至っ

ている患者さんもいる。現在、2名の患者さんはきわめて良好な状態を維持しているため、レミケード®の投与を止めてMTXの内服だけで経過観察しているのだという。

「今のところ、このお2人は非常によい状態で推移しています。また、現在、産業医科大学の田中良哉先生が中心になって進められている『RRRスタディー*』に当院のその2例を入れていただき、研究の一翼を担っています。私が開業前に勤務していた北野病院の枠に、入れていただいているわけです。私としては、早期からレミケード®を積極的に使用すれば、約1年後には投与を一旦止められる可能性は十分あるという期待を持っています」。

*インフリキシマブ治療により導入された関節リウマチの低疾患活動性の維持に関する研究(多施設共同自主研究)

基幹病院とも緊密なネットワークを構築

病診連携に関しても力を注いでおり、先述した北野病院のほか、淀川キリスト教病院と大阪府済生会吹田病院の三院とは特に緊密なネットワークを築き、患者さん本位の、確実に安心な診療体制を構築している。

「MTXなどの抗リウマチ薬や生物学的製剤の使用を考える場合、間質性肺炎などの副作用を起こさないよう配慮することが大切になります。そこで、これら三院で適宜、胸部CTを撮っていただくなどしています。やはり、信頼できる医療機関と連携して、患者さんのための医療を提供することが大切ですね」。

最後に、これまでの成果を踏まえて今後の抱負を伺った。

「生物学的製剤の登場により、RAは『治る病気』、『コントロールできる病気』になってきました。そのことをまず患者さんにしっかりと伝えたいですね。講演会などでも積極的な啓発活動が続けていきたいと思っています。そして、なるべく多くの患者さんを苦しみから救って、患者さんの人生をよりよいものにする治療を提供していきたいと考えています」。



レントゲン室



点滴室



機能訓練室